「**御霊に属する人、肉に属する人**　」　丸屋信也著　いのちのことば社　より　まとめ

　なぜ成長できないのか…「こうあらねばならない」という生き方から、日々神の恵みに生かされる歩みへ

ここでは、実際の信仰生活の中で、御霊による歩みとは具体的にどのようなことなのか。自分がどの段階で

とどまっているのか、なにが御霊の歩みの障害になっているのか。

健全な信仰がより深められることを目指して、以下の3つの点から説き明かすことに力点を置いた。

☆１「御霊に属する人」と「肉に属する人」との相違を明らかにし、健全な信仰と律法的な信仰を具体的に識別。

☆２律法的な信仰(肉に属する人)から健全な信仰(御霊に属する人)へ成長するにはどうしたらよいか。

☆３成長の本質である、御霊によって歩むこととは、みことばに固く立つとは、実際にどのようにすることなのか。

**Ⅰ　霊のない人、霊を持っている人、霊に生きる人**…三種類の人間

**１生まれながらの人間**Ⅰコリ2：14　＊生まれながらの人とは、救いを受けていない/神を知らない/受け入れない人々のこと。

　「生まれながらの人間は神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。

また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。」

＊神が土の塵でアダムを創造し鼻からいのちの息を吹き込む。このいのちの息とは霊的ないのち。人間が神のかたち

　に似せて造られたことの意味。アダムとエバはサタンに誘惑され、神から離れ、神のかたちが破壊され、人間は

　神を知ることができなくなった。クリスチャンはそのような状態から、イエスキリストの十字架のゆえに、信仰に

　よって救われ、その時に与えられた霊のいのちが聖霊。イエスキリストを信じることによって私たちの内側に聖霊

　が宿って下さり、この霊のいのちによって導かれる。

**２肉に属する人**Ⅰコリ3：1-3　＊「キリストにある幼子」福音に生きて成長していくことができていない人たちのこと。

　「 さて兄弟たちよ。私はあなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、

肉に属する人キリストにある幼子に対するように話しました。私はあなたがたには乳を与えて堅い食物を

与えませんでした。あなたがたにはまだ無理だったからです。実は今でもまだ無理なのです。あなたがたは

まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に

属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではありませんか。」

＊キリストによって救われ霊のいのちは持っているが、その霊に従って生きることができていない。この世の考え方

　や価値観に影響されて生活し、実生活の中で成長できず、霊的に幼い状態にとどまっている人のこと。

☆ｃｆ霊的に成長した人は一致に向かう傾向がある。ひとりよがりな信仰や自分のことだけを考える信仰、

分裂分派の姿ではなく、他者のことを愛をもって助け励まし、キリストをかしらとして一つになっていく姿勢。

単に御霊を持っているだけでなく、その御霊に生きている人。

**３肉に属する人の、律法的信仰という落とし穴**

＊多くのクリスチャンも、確かな救いを受け、御霊に従って歩んで行きたいと願っているが、なかなかそれが生活の

 上で実践として表れてこないという現実がある。信仰と生活にギャップが生じ、そこで悩み、答えがなかなか見つからず、祈りが足りない、もっとみ言葉を読まなければと一生懸命頑張るが、いくら頑張っても自分がこうある

べきと思う状態にはならず、一時的にはなっても、それが継続していかない。これが肉に属する人の律法的な信仰。

**４御霊による歩み**ロマ8：1-4

　「こういうわけで、今はキリストイエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜならキリスト・

 イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。肉によって無力になったため律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。」

御霊に従って歩むなら、 神が求める要求を完全に満たすことができる。本来私たちが満たさなければならない

律法の要求をイエスキリストが私たちに代わって100％満たして下さった。イエスキリストの十字架と復活によって私たちが満たすべき律法の要求を完全に満たして下さり、「「罪と死の原理」律法を守れない為の罰としての死から解放され、単なる肉体の死だけではない、永遠の霊的な死から、解放された。これこそ「命の御霊の原理」。

＊私たちが満たすべきだった律法の要求はイエスキリストによってすべて完全に満たされたという信仰に立って歩む。

**５罪悪感の理由**

＊人間関係や家族関係のトラブル等の問題に直面した時、悩み、悔い改め、赦しを得たと確信し新たな思いをもって

 スタートしても、また何か別の問題に直面し、同じことをくりかえす。 いつしかそれが慢性化し、半分あきらめの

　気持ちが生まれ、信仰とはまあこんなものかという気がしてくる。何かが上手くいかなかったり、思うような行動

　がとれない時に罪悪感が生じるのは、肉に属する人としての歩みをしているから。自分自身が、イエスキリストに

　よって神に100％受け入れられているという恵みを信じきれていない状態。自分ではそれを意識していない。

**６心の穴を埋めるもの**

＊罪悪感や不安が生まれると、心の穴のようなものができ、信仰の形式的なことを守ることで、その不安を埋め合わ

　せようとする。例えば、隣人を愛さなければと思っているのに妬みを感じてしまった・批判をされて怒りを感じた

　というような時、悔い改め、もっと聖書を読もう、祈ろう、人に仕えようと考えるなら、それが自分の定めた律法

　になってしまう。それを決めたとおりにできないと、もう平安が無くなる。何かを守れば祝福されるとか、自分が

　こうすれば神はこうして下さる、という考え方こそ律法的信仰そのもの。

**７肉に属する人の反応**

＊御霊をいただいていながら御霊に従って歩んでいないという状態に陥っている。心の深いところで自分自身が

　作った「愛さなければ、赦さなければ、仕えなければいけない。もっと祈り、み言葉を読まなければ…」という

ルールに従わなければいけないと思っているので、実は律法に従っている。

**８御霊に属する人の反応**＊～したいと思っていても、怒りや憎しみや妬みを感じてしまう。でもそんな自分を神さま

　がイエスさまを十字架にかけてまで赦して、愛してくださっている、本当にありがとうございます。」と神の恵みに

　立つ。次にその人にあった時には、自分のことをこんなにまで愛してくださっている神の愛に根ざして、その人に

　関わらせてください。と祈る。これは、肉に属する人が目標にしている姿と同じようであっても、動機が全く違う。

　罪悪感や不安による「もっと愛さなければ」という動機からではなく、自分を愛してくださる神の愛を体験する

　ことによってそうしようと思う。その時はそう思っても、次にその人にあった時に、また嫌なことを言われたら

　やはり前と同じ気持ちになってしまうかもしれないが、それでも神さまの赦しと愛は変わらないことを知っている

　ので、神さまはあの人のことも同じように赦し、愛しておられるということがわかる。このようにどこまでも

　神の赦しと愛と恵みに生きてゆく時に、神さまの愛に押し出され、自分ではない新しい自分がそこに現われてくる。

　これが成長なのです。

**９肉の歩みは自己中心**　＊肉に属する人とは、神によって救われ御霊を宿しているが、生き方自体は自己中心的で、

　罪を犯した時に、次はああしよう、こうしようと自分で作った律法に従おうとし、自己中心的な行動を取り、

　それを守るとホッとする。そして、自分だけではなく、他人のことも裁くようになり、「あの人はまだまだだ」

「あの人は熱心じゃない、霊的じゃない」と知らず知らずのうちに人をさばいてしまう。神の御心や神の基準ではなく、人間の基準、自分自身の判断で物事を理解し、人生のかじ取りをしていく行為であり、神を信じていながら、自分自身の判断で信仰のことも決めようとし、神に従っているつもりでも、神以外のものに従っている。

**１０恵みのパラドックス**　＊私たちはイエスキリストによって律法から完全に自由にされ、完全に神のものとなった。完全な自由が与えられ、その自由を与えて下さった神の御心にかなった歩みをしたいと、心から思う神の奴隷。

それが御霊に属する人の姿。自分で考え、決断し、行動していく上で、主のみ心にかなった決断をし、そのように行動したいと願う。「しなければならない」という思いで行動しているうちは、主のみ心にかなった者になりたいという真の願いは育たない。神の目が離れると、自分のやりたいことをやり始める。新生したばかりのころにはそういう時期があってもよいが、20～30年経っても変わらずそこにとどまり続けるなら、その人は何十年経っても

霊的に成長することのできない、肉に属する人であり続けてしまう。